白鳥・鷹と鍛冶

――二荒山縁起の「朝日の里」を尋ねる――

福田　晃

一．有宇の中将物語

およそ『二荒山縁起』（至徳元年〔一三八四〕以前成立）は、下野・日光三所権現の垂迹縁起なる第一部とその日光権現の祭祀由来なる第二部とから成っている。その第一部が鷹飼の上手・有宇の中将の物語であり、第二部が狩猟の名手・猿丸大夫の物語である。それは元来、別々な形で成立したものと推されるが、それを一続きの物語として編集したのが当縁起であり、その継ぎはぎの不自然については、前稿「『二荒山縁起』成立考―放鷹文化とかかわって―」[①]においてすでに指摘したことである。しかも当縁起についての考察は、柳田国男氏の『神を助けた話』[②]をはじめ、ほとんど第二部の猿丸大夫の物語に関するものであったので、わたくしは、前稿において、両者にわたって、その成立を考察したのである。本稿は、それを補うもので、特に第一部の有宇中将物語をとりあげ、その原風景「朝日の里」に、鷹に導かれた鍛冶文化の可能性を明らめようとするものである。

そこで、前稿を繰り返すことになるが、その第一部の垂迹縁起の梗概をあげることから始める。それは第一種の真名本（日光山二荒山神社蔵写本）[③]により、適宜、第二種の仮名本（日光二荒山神社蔵絵巻）[④]で補い、それを括弧内に示すこととする。

〔発端〕主人公の旅立

(1)　花洛の有宇の中将は、（明け暮れ鷹狩を好んでいて、秋の初鳥狩の野遊びに出仕を忘れ）、御門のご勘気を蒙る。　〔異常な鷹遊び〕

(2)　中将は、青鹿毛と称する馬に乗り、雲の上という鷹、悪駄丸（阿久多丸）という犬を伴い、内裏をしのび出る。　〔遍歴の出立〕

〔展開・Ⅰ〕異郷訪問

(1)　中将は、四日（七日）目に、東山道の下野国布陀羅山（二荒山）に着き、菅の繁茂する山菅橋を渡って、一夜を過す。夜明けとともに出立し、（標茅ヶ原・那須のしの原・白河の関・安積の沼を経て）三日ほどして、奥州の朝日の里に着く。　〔奥州入り〕

(2)　その里の朝日長者には、十四歳になる美しい姫君があり、中将はそれに心を動かし、懸想の文を贈る。その文のみごとさを見て、長者は雲の上人と察し、中将を婿に招き入れる。　〔中将の婿入り〕

〔展開・Ⅱ〕帰郷遍歴

(1)　六年後、中将は都の母上を夢にみて、馬・鷹・犬を連れて帰郷を志す。朝日姫は、縹の帯の端を結んで、中将と互いに持ち合い、別れることあれば解けると契り、旅行く一日目に会う大川の妻去川の水を飲んではならぬと教える。　〔朝日姫の教示〕

(2)　中将は朝日の里を出た一日目に大川に出る。一旦は飲むことをためらうが、辛抱ができず、引き返して馬の鞭の先で飲むと、忽ちに気を失う。五日ほど川の辺りに伏しているが、心を取り直し、再び

馬に乗り五日かかって布陀羅山の麓に着く。　〔妻去川の罹病〕

(3)　中将は、馬には母への文、鷹には朝日姫への文を託す。朝日姫は、中将の結んだ縹の帯の結びが解けたので、里を出て七日目に妻去川なる阿武隈川の辺りに着く。そこへ鷹が飛んで来て中将の文を落す。（姫は返しの文を鷹に託す。）　〔朝日姫の跡追い〕

(4)　中将の馬が都へ登り、文を大将殿の許に届けると、母上はすでに亡くなっており、舎弟の中納言がその馬に乗って布陀羅山に赴くと、中将は亡くなっておられる。朝日姫は妻去川から五日かかって布陀羅山に赴き、中将の死体を見て、悲しみのあまり自らもみまかってしまう。　〔中将夫妻の横死〕

〔結末〕主人公たちの神明示現

(1)　一旦死んだ中将夫妻は、閻魔王のはからいで蘇生する。中将はこれまでの経緯を御門に奏聞すると、大将に任ぜられ、東八カ国より陸奥までを所領として給わる。まもなく夫妻の間に御子が誕生、馬王と名づけられ、やがて中納言に任ぜられる。　〔一門の栄花〕

(2)　最後に、有宇の大将は布陀羅山に帰り、そこでむなしくなり、本宮（後に新宮大権現）に祝われたまう。本地は千手観音である。朝日姫も隠れなさって滝尾（女体権現）と現われたまう。本地は阿弥陀如来である。また、中納言も両親の二荒山に入り、太郎大明神と祝われ、新宮（後に本宮大権現）と申し上げた。馬頭観音が本地である。　〔三所権現示現〕

右のように『二荒山縁起』の第一部は、鷹狩の上手なる有宇中将の流離遍歴の物語で、その苦難の果てに、二荒山の神明に示現したとする垂迹本地譚である。平安時代、公的な鷹飼の職は、朝廷の蔵人所の管理下にあった。[5] その蔵人所の頭の一人が、近衛の中将である。したがって、頭の中将なる「有宇」という人物が、青鹿毛と称する馬に乗り、雲の上という鷹を据え、悪駄丸という犬を伴って、東国から奥州へ向かう道行は、あるいは白鳥を追う鷹飼たちの鷹場めぐりを隠すものとも言えるであろう。しかもその有宇中将の奥州入りの最初を二荒山の山菅橋に求め、最後の神明垂迹の地を二荒山とする叙述は、この物語の原拠が、元来、日光山の鷹飼集団に支持されて成立したと推される。それが前稿の論旨というべきであった。

二　奥州・朝日の里の行方

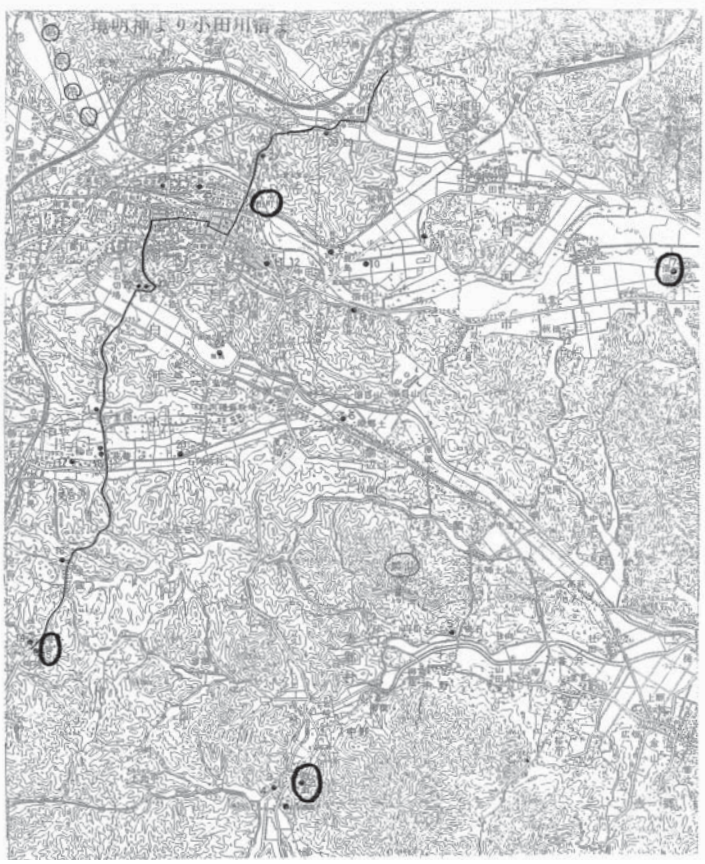
さて、前稿において概略は説いたことではあるが、有宇中将の鷹場めぐりにおいて、見出された美しい姫君の「朝日の里」を本文に沿って、やや丁寧に検しておくこととしよう。

まずそれは、二荒山から奥州への道行、展開・Ⅰの(1)〔奥州入り〕にうかがえる。それを第一種本、真名本（日光二荒山神社蔵）は次のように叙している。

彼（山菅橋）河岸ヲ行過キスシテ、木下ニ馬ヲ立ヌ。鷹ハ飛上リテ梢ニ居ル、中将馬ヨリ下給テ、苔莚ヲ片敷、一夜留リ給フ、
夜モ漸ク明レハ、馬ニ向テ宣ルハ、是ニ留ルヘキヤ、猶ヲ行末ニ住ムヘキ所有ヤト仰ケレハ、馬聽テ立向ケル、佐テハ行ヘキ所有リヤト乗給フ、又何方モ無ク馬ニ任テ行給程ニ、三日ト云フ午剋計ニ、里中ニ出テ見亘給ヘハ、方四丁余リニ築地ヲ突キ、棟門平門有リ、（中略）此国ヲハ陸奥、此里ヲハ朝日ノ里ト申所也、彼主ヲハ朝日長者殿と申也、……

『二荒山縁起』の編者は、有宇中将の東国・奥州への道行は、古い東山道によったものとして叙述しているようである。その東山道は、下野に入ると「足利・三鴨（みかも）・田部（たべ）・衣川（きぬがわ）（二荒山）・新田（にいた）・磐上（いわかみ）・黒川（くろかわ）」の七駅

を経て、奥州の初駅「雄野」に至る。その「雄野」は、「和名抄」には「小野郷」とあり、「延喜式」兵部省諸国伝馬の条には「雄野駅」とあり、



「福島県教育委員会『奥州道中』より転載」

沿道名称一覧（福島県教育委員会編『奥州道中』）

1　白河関跡（平安時代初）　2　供養塔（鎌倉時代）　3　地蔵（正徳四年〔一七一四〕）　4　関道標（延享三年〔一七四六〕）　5　硯石磨崖三十三観音（江戸中期）　6　道標・開海道（文久元年〔一八六一〕）　7　借宿廃寺跡（奈良時代）　8　感忠銘磨崖碑（文化十年〔一八一三〕）　9　鹿島神社（平安時代）　10　転寝の森（平安時代）　11　宗祇戻し（室町時代）　12　道標・白河城羅郭岐路碑（文政五年〔一八二二〕）　13　供養碑（鎌倉時代）　14　境明神社（不明）　15　藩界石柱（寛政頃）　16　観音寺（応永年間）　17　金売吉次の墓（鎌倉時代）　18　八幡神社（不明）　19　地蔵（享保十八年〔一七三三〕）　20　阿弥陀石（鎌倉時代頃）　21　供養碑（寛政五年〔一七九三〕）　22　戊辰戦争戦死者墓（明治初年）　23　権兵衛稲荷神社（江戸中期）　24　南湖公園（享和二年〔一八〇二〕）　25　小峰城跡（寛永九年〔一六三二〕）　26　立教館跡（寛政三年〔一七九一〕）　27　地蔵（正徳五年〔一七一五〕）　28　大清水（江戸時代）　29　道標（嘉永四年〔一八五一〕）

およそこれに当るものと推される。吉田東伍氏の『大日本地名辞書』[6]は、これを白河郡小野郷とし、「旗宿より中野・番下・社川の辺の地形は、まさに小野といふにあたれり」としている。が、「歴史の道・調査報告書」の『奥州道中』[7]は、その遺跡からみて「旗宿」（関村）が最有力であるとする。かの白河関跡も当地に想定されており、後には関街道とも称されている。また当地周辺には、さまざまな伝説をとどめている。「転寝（うたたね）の森」「庄司戻しの松」「金売吉次の墓」や「宗祇戻し」などがよく知られている。[8]

さて右の『二荒山縁起』における有宇中将が奥州に入って、最初に遭遇した「朝日の里」は、まずはこの小野郷が当るようにも思われる。また小野の猿丸大夫の出自は、奥州・朝日の里ともあれば、当地がふさわしいと推されるであろう。――しかしこれは第二部の叙述によるもので、それを前段の一部の叙述の説明に使うことの矛盾は別稿でも説いている――。また日光の山菅橋から朝日の里への道行が、三日とすることも、一応、妥当と考えられる。しかし、この「旗指」なる小野郷を「朝日の里」と認めると、その後の叙述と齟齬が生じてしまう。以下でそれはあげているが、まず阿武隈川の流れが、小野郷の北方に位置するのが、その後の叙述と矛盾する。およそ阿武隈川は、福島県と栃木県の県境、那須山地の三本槍岳の山麓に発し、県境にほぼ並行して東流、やがて白河市街を過ぎて、中島村川原田附近から北に転じて流れる。したがって東山

道は、旗指から関山を越え借宿の北で阿武隈川を渡ることになる。――なお、白河明神から『奥州道中』によれば、白河宿田町で川を渡る――[9]。しかし、『二荒山神社』の叙述は、「朝日の里」のはるか南に、妻去川なる阿武隈川の流れを見出しているのである。

そこで仮名本（日光二荒山神社蔵絵巻）の中将の「奥州入り」の叙述をあげてみる。

これ（山菅）を橋としてわたり給ひ、一夜をとゝまらせ給、あけゝれは又馬にまかせていてさせ給ふ、

（絵）

かくてもとのことく山すけのはしをうちわたり、しめちか原のあさ露に、たひのたもとをぬらしつつ、那須のしのはらはる〳〵とけふしら川の関こえて、あさかのぬまの花かつみ、かつみぬかたに旅たちて、三日と申に、さもいみしけなる人の家井ある所に、つかせ給、（中略）あさひの長者殿とて、みちのくにに其かくれましまさすと申けり、

およそ東山道は、陸奥に入ると「雄野（をの）・松田（まつだ）・磐瀬（いわせ）・葦屋（あしや）・安達・湯日（ゆひ）・岑越（みねこし）・伊達・篤借」と続く。仮名本は、二荒山・山菅橋から東山道に沿いながらも、その宿駅名にはこだわらず、歌枕を尋ねて「標茅ヶ原」「那須の篠原」「白河の関」「安積の沼」を経由したとする。その「朝日の里」を少なくとも安積よりも北方に位置づける点では、真名本と違って、その後の叙述と齟齬は見られない。しかしその二荒山から朝日の里までの道程（みちのり）を真名本に準じて「三日」としており、これもまた真名本とは違った現実離れの矛盾を冒した叙述となっていると言える。

次に今度は、有宇中将の「朝日の里」からの帰りの道行、つまり〔展開・Ⅱ〕帰郷遍歴の場面を検してみる。(1)〔朝日姫の教示〕(2)〔妻去川の罹病〕の叙述である。まずは真名本をあげる。

四

(1) 中将宣ケル、吾レハ二親御坐ト雖モ、御門ヨリ勅勘ヲ蒙リ、故ニ都ヲ忍ヒ出テ、此国マテ降リ候、只今夢ニ母上ノ見ヘ給テ、汝故ニ此世ニハ無キ身ニ成ヌト宣ナリ、上洛シテ母ノ行末ヲ聞カント、暇ヲ乞セ給ヘハ、朝日ノ君宣ケルハ、佐ニハ何カ程共、人ヲ引キ具シ給ウヘキト仰ケレハ、中将都ヨリ降シ時モ青鹿毛ト云馬、雲上ト云鷹、悪駄丸ト云犬、是計ヲ具足シテ下リ候キ、此等未タ絶ヘス候、余人無益也、只一人出給ケル、朝日ノ君ハ思ノ余ニ、縹ノ帯ノ端ヲ結ヒ中将ニ奉給、中将モ又縹ノ帯ノ端ヲ結ヒ取違ヒテ宣ケルハ、君モ吾モ身失歎有ラン時ハ、此ノ帯ノ結目解ケント契リ置テソ出給フ、朝日ノ君ハ中将ヲ呼ヒ返シ宣ケルハ、此国ニハ不思議之事侍ヘリ、是ヨリ一日路ノ内ニ大河有リ、名ヲハ妻去河と云リ、彼河水ヲ呑ム者ハ、立皈リ思人ニ合ワスト云ナリ、相構テ此水ヲ呑ムヘカラスト仰シヲ、中将承リ候トテ出給ヘリ、

(2) 現ニ一日路ヲ行テ見給ヘハ、誠ニ大河有リ、彼ノ河水ヲ見ルヨリ、呑思ウ心侍リシニ、実ヤ此河水ト思テ打渡給ウニ、此水ヲ呑マスンハ命モ生イヘカラスト覚エシカハ、力モ及ハス、馬ヲ引返シ鞭ノ鋒ニテ結ヒ揚テ呑給テ、忽ニ身ニ心労ヲ受ケ、心モ心ト覚エス、馬ヨリ下ツ、彼ノ野辺ニ五日カ程臥給。少シ取リ直シ起テ見給ヘハ、馬ハ側ニ立ツ、犬モ鷹モ有リ、馬ニ向テ仰セラル、ハ、跡ヘ返ルヘシトモ覚エス、又上洛スヘキトモ覚エス、吾カ骸ヲ落スヘキ所ヘ具足シテ行ケヤト宣ケレハ、馬モ涙ヲ流シ立チ向ウ、佐リトテ中将馬ニ乗リ給テ、閑ニ歩セ給シ程ニ、五ヶ日ト申セハ布陀羅山ノ麓ニ一夜留リ給シ所ニ行ニケル、

これによると、朝日の姫が呑めば命を失うと忠告した妻去川は、朝日の里からおよそ一日で迹る所にあるとする。それにもかかわらず中将はその水を呑み、病に倒れる。しかし伴の馬・鷹・犬に力を得て、五日か

かって二荒山の山菅橋の許に着いたという。さてこの場面を仮名本で見るに、文体の違いはあるが、その叙述に大きな違いは見出されない。朝日の里から「つまさか川」までの道のりも、「一日ゆきて大河あり」とする。ただし、その川の辺りで五日ほど臥したとする叙述は真名本と一致するが、そこから日光山への道中は、「さて馬に向て仰せけるは、我命なからふへしともおほえす、いつちへも心しつかならむ所へとく〳〵具足せよと仰けれは、たちよりのせ奉て、はしめ一夜と丶まらせ給たりし東山道の山中へいれまいらせぬ」と、簡略な叙述ですませている。

次に、右に続く(3)〔朝日姫の跡追い〕をあげてみる。ここでは、真名本・仮名本を対照してあげてみる。

真名本

又雲ノ上ト云ウ鷹ヲ召テ、汝ハ同シ生類トハ雖モ、余リニ心倍ル物也、朝日ノ君ノ御所へ此文ヲ進スヘシト、文ヲ鷹ニソ取ラセ給ケル、一首此ク、

契来之妻去河能水故仁露能命土成ル楚悲記

鷹ハ此文ヲ加テ、東路ノ方ニ向テ飛ヒ去リヌ、中将ノ御許ニハ犬計リソ留リケル、

朝日ノ君ハ、中将ノ結ヒ給ヘル縹ノ帯ノ結ヒ目ノ解クヲ見テ、歎セ給テ人目ヲ忍テ、中将ノ跡ヲ行セ給シ程ニ、七日ト謂ウ、彼ノ妻去河ノ彼汰（はた）ニ付セ給ウ、樵夫（キコリ）ノ有シ雇イ、此河ヲ越セ給ケリ、佐ル程ニ、天ニ鈴ノ音の聞シヲ御覧スレハ、鷹ハ飛ヒ来テ、朝日ノ君

仮名本

又朝日の君へも御文こま〳〵とあそはしてかくなむ

ちきりきしつまさか川の水ゆへに露のいのちとなりにけるかな

とあそはして、鷹にむかひての給ひけるは、馬はみやこへゆきぬ、汝このふみ朝日の君にたてまつれとてたはせ給、

さる程（ほど）に、朝日の君のはなたの帯とけたりける程に、あやしみて夜にまきれてあくかれいて給つ丶、七日と申に、妻離川につき給ひぬ、いつくともなく鷹とひきたりて御文をおとす、中将殿の御文なりけれは、やかて御かへしあり、

ノ歎セ給ウ所へ、結ヘル文ヲ加テ進ル、取リ上ケ御覧スレハ、中将ノ御文也、御返事申、膚ヨリ筆墨ヲ取出テツ、書給ヘリ、

結ヒ置キシ縹能帯越知辺尓天君賀跡於楚尋天和行ク

若シ未タ中将死給ハヌ者ナラハ、此文ヲ持テ進スヘシト仰有シカハ、鷹文ヲ給テ飛上テ去ヌ、

むすひをきしはなたの帯をしるへにてわかれし君を尋てそゆく

われよりさきにとくして奉れと仰けれは、鷹いそきとひかへりけり、

（絵）

カラー地図。阿武隈高地、福島盆地など

右のように、「雲の上」という鷹が介在する中将と朝日の君との相聞歌の叙述である。真名本がやや饒舌で、絵を有する仮名本は、それゆえに簡素な叙述となっている。その舞台は、悔やしい妻去河（つまさか川）である。そしてその地への道のりは、馬に乗った中将の場合は、朝日の里から南へ僅か「一日」であったが、徒歩（かち）による朝日の君の場合は「七日」を要している。その位置は、〔奥州入り〕では矛盾を含んで叙されていたが、少なくとも仮名本によると、安積の沼の北方に、妻去河なる阿武隈川があることとなる。先に検したように、その阿武隈川は、陸奥への入口、境明神を祀る白河の関の北方で、流れをかえて北に遡上してゆく。これに沿って東山道も北上するが、やがて厚樫山を目前にする辺りで、阿武隈川は東へ蛇行してゆく。その東山道と阿武隈川が分岐するところが、およそ当縁起が叙する妻去川と想定される。それを東山道の古道にしたがえば、「岑越」（信夫山の別名、越の浜にもとづく）を越えた「伊達」（伊達郡衙の桑折地区）附近があたるであろう。そして朝日の里は、さらに北上した天険の地「篤借」（厚樫）を越えた向こうに想定されているように推される。言うまでもなく、その「篤借」は、奥州の入口「白河の関」に対する岩背（いわしろ）国の北限である。その厚樫山の向こうは、いわゆる異郷の「えみし」の地である。『二荒山縁起』の編者は、およそその地に朝日の君の住む「朝日の里」を想定していたにちがいあるまい。

三．白鳥・大鷹の飛翔する白石盆地

さて、右のように、鷹狩の上手・有宇中将が、〔展開・I〕「異郷訪問」の〔奥州入り〕において紛れ込んだ「朝日の里」は、岩背（いわしろ）国の北限・厚樫山の向こうに想定されるのである。

そこで、それにしたがって厚樫山の峠道を越えると、視界が開けて白石の盆地が飛び込んでくる。東山道の「柴田」に至る途次である。その中央を白石川が東流して太平洋の直前で阿武隈川に合する。この白石川に北から松川、南から斉川が流れ込む。その盆地の西北には蔵王の霊峰が望まれ、その前山なる青麻山をみる。しかもこれらの清流には、遥かなる昔より白鳥の飛来があり、それを追う大鷹が集まっていたと推される。すなわちそれは、当地が白鳥を追う鷹飼たちが、はやくから活動した鷹狩の聖地であったということである。「二荒山縁起」の有宇中将は、その象徴的存在とも言える。そしてその中将が、いち早く心を寄せた朝日の君の「朝日の里」は、この白鳥の里、大鷹の里を擬するものと推される。

ところで、その白鳥の里の中心は、今も白鳥の飛来する、白石川に松川が注ぎ込む合流地、蔵王町の「宮」に鎮座する苅田嶺神社に求められる。白鳥大明

白石川の白鳥飛来地

曲竹・鍛冶沢より青麻山を望む

宮地区の刈田嶺神社

刈田嶺神社の白鳥古碑群

神を祭神とするが、今日では日本武尊を宛てている。はやく『新抄格勅符抄』の引く大同元年牒（八〇六）に「刈田神　二戸」とあり、『続日本後記』承和十一年（八四四）八月十七日の条に「奉授陸奥国無位勲九等刈田嶺神（中略）並従五位下、縁レ有二霊験一」と記されており、同書嘉祥元年（八四八）五月一三日の条には、「刈田嶺名神五位下」とある。また『三代実録』貞観十一年（八六九）二月八日の条には「従四位下」の授けられた由が記されている。しかも「延喜式」神名帳には、

苅田郡一坐大　苅田嶺神社名神大

とあり、式内社に封じられている。この苅田嶺神社は、はやくは現在の社殿の西北にそびえる青麻山（釈迦岳とも称す。海抜七九九米）に祀られていた。その後にその南麓の西山（字内山）に若宮が創建され、やがて山頂の刈田嶺神社の神霊を若宮にお移し申して祭祀が営まれてきた。それを永正年間（一五〇四～一五二一）に西山から現在の宮地区に移され、今日に至っている。[10]

この宮地区の苅田嶺神社（白鳥神社）を中心に、その白石川および支流に沿って幾つかの白鳥神社が鎮座する。勿論それは、当地域の白鳥の飛来とかかわるものである。当社を含めて、それをあげてみる。

白石市（越河村）五智・中郷良の白鳥神社。白石川の支流・斉川の水源地に祀られる。越河地区刈田郡の南端、東山道の「篤借」と接する。日本武尊が東征の折、湖沼だった越河を舟に乗ってこられて、当地で身を暖められた。それゆえ当地に身暖明神を祀り、湖沼に白鳥の大群が飛んできて尊を迎えたので、白鳥神社を奉祠したという。[11]

白石市（斉川村）平・明神山の白鳥神社。右の身暖明神の斉川対岸に祀られる。日本武尊が舟に乗って当地に上陸したので舟ヶ崎明神とも称されている。[12]

白石市（深谷村）宮林の白鳥神社。元は本山神社とも称されたが、後にあげる白鳥伝説（児捨川・長袋の由来）とかかわるとして、日本武尊を祭神として祀る。[13]

蔵王町宮・馬場の刈田嶺神社（現在は、白石川の支流に松川の注ぎ込む東岸に祀られている。）祭神は日本武尊、白鳥大明神を祀るとされる。[14]

大河原町金ヶ崎・大高山神社。金ヶ瀬の西端、刈田郡境に近く、東流する白石川左岸の丘陵先端にある。大鷹宮とも称される。近年は白鳥を祀るとして日本武尊を祭神とする。元は当地の北、一・五粁ほどの旧平村台山に鎮座、元禄三年〔一六九〇〕に社前の尾鷹の地に移転、さらに大正三年〔一九一四〕当地に遷宮して今日に至る。[15] 由緒については後述。

村田町・七小路の白鳥神社。村田町は大河原町に東隣するが、東流

する白石川の支流、荒川左岸の相山丘陵の小高い丘の南面に祀る。祭神は日本武尊。[16]

柴田町船岡・内小路の白鳥神社。東流する白石川が阿武隈川に合流する直前、その南岸に祀られる。祭神は日本武尊である。[17]

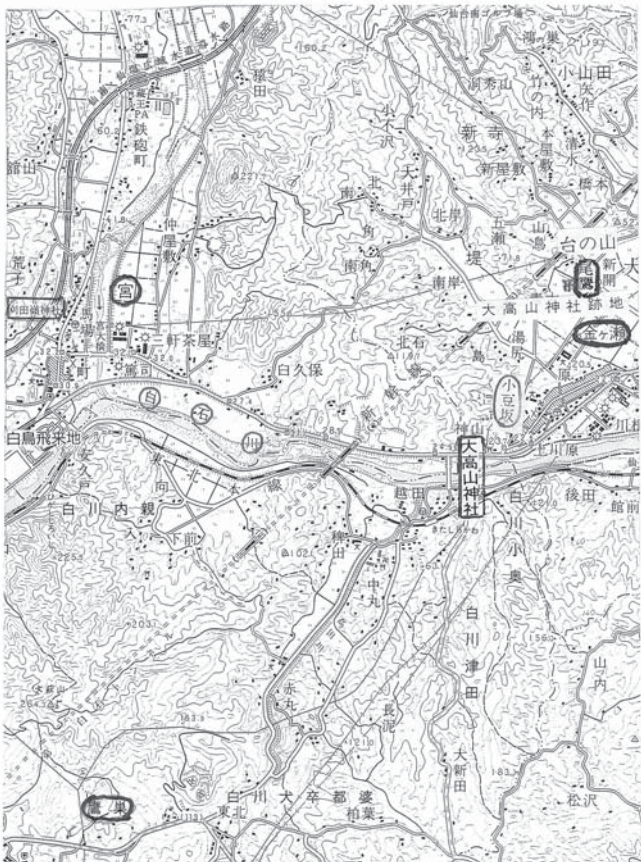
いずれも古くから白鳥の飛来する地であれば、それが信仰の対象になったものと推される。

一方、当地における鷹の生息とその信仰をみてみよう。まず地図を広げて目につくのは、白石盆地の東南にある「大鷹澤村」である。しかしこの村名は、明治二十二年の町村制の実施の際に、大町村・三澤村・鷹巣村の三ヶ村をもって結成されたものである。その鷹巣村は、白石川・斉川の東側にのぞまれる丘陵地帯にある。その地域内は古墳時代の多くの円墳や前方後円墳が見出されており、その丘陵南側山麓は早くに集落が開かれたと推されている。[18]そして、その「鷹巣」の地名は、言うまでもなく鷹の棲息を示すものであり、あるいは鷹狩に用いる鷹の育成が期待されていた土地でもあったと言えるであろう。勿論その鷹の子をいかに育成し、いかなる鷹狩に用いたかなどは明らかではない。ただ、その地名は、古くより当地が鷹飼の人々の活動する鷹場であったことを想定させるのである。そしてその「鷹巣」からほど遠からざる地に、大鷹を祭神とする大高神社（大鷹宮）が鎮座することが注目される。

そこで当地「鷹巣」の北方に東流する北岸の金ヶ瀬に鎮座する大高山神社を改めてあげてみる。すなわちその大高山神社は、先にふれたごとく、かつては当社の東北方の小丘陵、旧平村の「台ノ山」に存した。[19]昭和五五年の宮城県文化財調査報告書「台ノ山遺跡[20]」によると、縄文・弥生・古墳の各時代に、その遺跡が重複して存し、一部平安時代の住居跡も見出される。したがって当大高山神社は、そのような遺跡の上に祀られてきた。当社ははやく『続日本後記』承和九年〔八四二〕の条に「大高山」と見え、従五位にあずかっている。また、『三代実録』貞観十一年〔八六九〕三月一二日の条には、「従五位上」にあずかった由が見える。しかも『延喜式』神名帳には、

柴田郡一座大　大高山神社名神大

と記されている。大鷹山神社とも称されているが、それは式内社時代にまで遡るかは明らかではない。しかし鎌倉時代には確かに「大鷹宮」と称されている。[21]その台の山の近くには、「馬取沼」や「御誓沼」があり、後に移住した社前の地は「尾鷹」とも称されている。[22]白鳥を追う「大鷹」を祀った聖地であったと推される。ちなみにその神主は、代々、大鷹氏を名告っている。[23]古く「大鷹」を祀る神社であったにちがいない。しかし、隣接する苅田嶺神社との関係も深く、その白鳥伝説の流布のなかで、



大高山神社・鷹巣を中心にしたもの。

大高山神社旧社地跡（旧平村尾鷹）

現大高山神社神殿（金ヶ瀬町神山）

今日は日本武尊を祭神とする。これは谷川健一氏が「鷹と白鳥」として説かれるごとく[24]、元来、白鳥を祀る苅田嶺神社とセットをなして、大鷹を祀ってきたものと言える。そして、それは、当地方が白鳥を追う鷹飼の集う鷹場であったことに応ずるものであったにちがいない。

しかし、この大高山神社・苅田嶺神社を祀る白石川流域が鷹場として世に知られるのは、そう古くはない。今あげている「二荒山縁起」にしたがうならば、鎌倉時代まで遡るはずであるが、その具体的資料は、戦国時代にまで下る。それは山名隆弘氏が「伊達政宗の鷹と鷹狩[25]」にあげられるが、それによると政宗は国元における鷹場としては「白石より仙台への道通」にあったという。またその「道通」でも、白鳥は白石では鉄砲で打たず鷹で合わせよと命じている。それは寛永二年〔一六二五〕五月吉日付の書状によるものであるが、それに先立つ慶長十三年〔一六〇八〕付の書状によると、白鳥は念を入れてとらえること、近ごろ苅田・柴田の白鳥が少なくなっているから、「鳥の法度」を出して策を講じよと命じている。また、政宗の重臣・片倉小十郎景綱に始まる白石藩も、当地域を鷹場としてしばしば鷹狩を試みていたようである。たとえば、『片倉代々記[26]』によると、五代藩主・村休は、享保二年〔一七一七〕三月廿日、白石川の支流・斉川において鷭（バン）の鷹狩を催している。また六代藩主・村信（宮床伊達家当主）は、享保九年〔一七二四〕四月廿一日、白石を通る時に宮駅に休息、「白石河原より鶉御鷹野」を営ませている。僅かな記録で、その実態は詳しくは知り得ないが、白鳥を追う鷹狩は催されてはいなかったようである。それは、政宗がやがて当地域の白鳥を禁鳥とする施政をとったからである。それによって、大高山神社は、柴田郡の総鎮守であり、その氏子は白鳥を食さない習俗にしたがったのである。同郡村田町の白鳥神社、同柴田町の白鳥神社の氏子もこの戒めにしたがっている。現在、当大高山神社は、苅田嶺神社に準じて白鳥を祀り日本武尊を祭神と決している。つまりこれによって当社は鷹を祀る意義を忘却することになったものと推される。

四．白石川の白鳥伝説

そもそも白鳥は、わが国においては、高貴な御魂の憑りつくものと観じられてきた。それゆえに、鎮魂（タマフリ）の祭の頃ほい、その御魂が憑く白鳥を追う放鷹のわざは、聖なる「魂まぎ」にほかならなかった。それを端的に叙したのが記・紀におけるもの言はぬ挙津別皇子の魂まぎ説話であった。それは大鷹によって白鳥（鵠（くぐい））を追い、その生命が再生したことを語るものであった。しかもその「魂まぎ」の「鷹のあそび」は、古代社

会においては、上ご一人（天皇）に限定され、これに準じた上流貴族にのみ許されることであった。（が、やがてそれは、平安時代の軍事貴族にも導入されるに至り、戦国武将の鷹狩にも及んだのである）本稿の「二荒山縁起」における有宇中将の「奥州入り」もそれを語っているのである。勅勘を得て、鷹を据えてのそれは、そこに自らの魂の再生を求めての旅であった。その再生の地こそこの白石川周縁の鷹野・鷹場であったと推される。

ところで、その白鳥の里なる鷹場は、御魂の再生が期されるハレなる空間と観じられるが、殺生を戒める立場からすれば、ケガレのそれでもあった。つまりそこは鎮魂（タマシズメ）が求められる霊地でもあった。その鷹場の複合する事例をわたくしは、河内の交野（桓武天皇）、摂津の為奈野（多田満仲）、信州の滋野（祢津貞直）などで検してきた。[27] しかもそれらの聖地には、そのケガレから発する痛ましい魂の白鳥伝説の多くがみられたのである。今検している奥州の鷹場、白石川の周縁にも、その伝承が少なからず見出されるのであった。その幾つかをあげてみる。

①児捨川の由来

およそ享保四年〔一七一九〕刊の『奥羽観蹟聞老志』[28] 巻四〈名蹟類〉の項には、次のような伝承があげられている。今は書き下し文にしてあげる。

児捨川（コステカハ）

宮ノ駅ヲ去ルコト六七町、小川有リ、是乃チ往昔乳母用明帝ノ皇子ヲ投グルノ地、即チ白鳥ト化セルノ河流ナリ、郷人之ヲ児捨川ト謂フ事ハ、柴田大高ノ下ニ詳シ、

これによって、同書の巻四の柴田郡「大高（おおたか）ノ宮或作二大鷹一」の項をみると、「縁起曰」として、次のような伝承を掲げている。以下、要約をあげる。

およそ欽明天皇第四皇子橘豊日ノ尊（すなわち用明天皇）が王位に着かれる以前、租税の徴収状況を調べるため、都を出て東国に赴く途次、当国の山中の家に寓居された。たまたまその家に玉倚妃と称する娘がいて皇子と契りを結ぶ。妃が皇子に語っていうには、一夜、白鳥がやってきて懐ろに入る夢を見ると子を孕んだという。やがて玉のような児を生み、皇子もこれを深くいとおしみなさった。しかし勅命により皇子は帰京することになり、必ず児を迎えに再び訪ねることを言い残して去ってゆかれた。しかし三年経過しても皇子からの便りはなく、妃は皇子を待ち焦がれて、遂に病に伏してしまった。その姫の看病をしていた乳母が、その幼児を抱いて近くの河畔に立ち、涙ながらに、「母君は父宮を恋い慕って、今にも命を殞そうとされている。あなたは神明の化した身であるから、母君の死に代って御両親の再会の志を遂げなさってください」と言って幼児を水中に投げ入れた。すると幼児は白鳥と化して飛び去った。妃はそれから間もなく亡くなり、乳母も悶絶して死んでいった。里人はこれを村の近くの山丘に葬り、そこに樹を植えて祀った。その後、その樹上に白鳥がやって来て、日夜激しく鳴くようになった。里人は京の皇子の許にこの旨を知らせると、深く悲しまれて侍臣を遣わして、天旗・雄剣・龍蹄・戎具・楽器などを届けられた。侍臣がこれを持参して妃の陵墓を訪ね、皇子の天意を述べると、その言葉が言い終わらないうちに白鳥（あるいは白鷹）が陵墓の上に飛びあがり、空中をさして去って行った。侍臣がこのことを皇子に奏すると、当地に白鷹社を建立することを命じられた。侍臣は重ねて玉机・宝鏡・筆硯・楽器・袍袴をもって当地に遣わされた。これを号して大鷹宮と曰うことになったという。

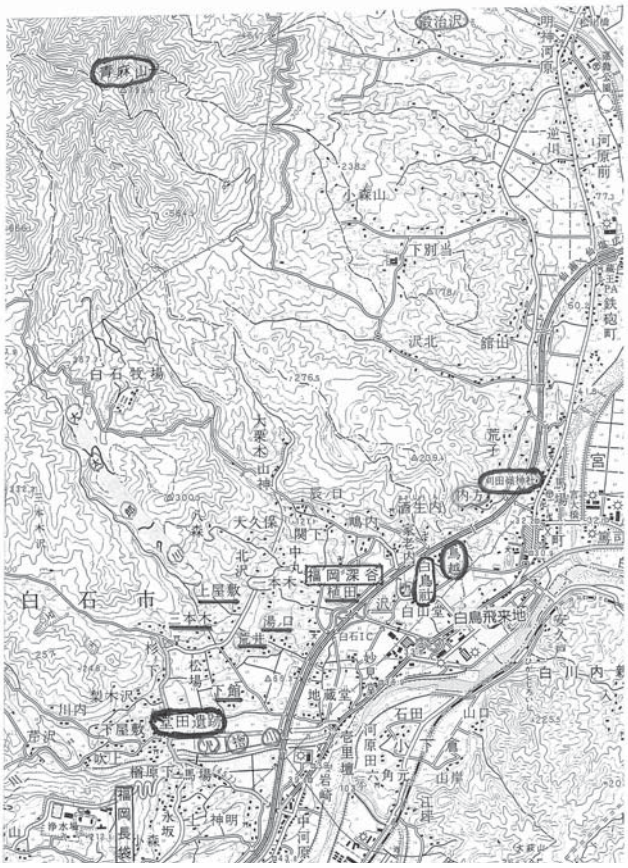
この用明天皇の東下りを語る伝承は、豊後の「炭焼長者」にもとづく

「真野長者物語」（幸若舞曲・説経節『烏帽子折』）に沿った「大高山（大鷹宮）縁起」[29]である。そしてその物語が奥浄瑠璃などを通して奥州各地に伝承されたことは、はやくに説かれている。[30]ちなみに、「奥羽観蹟聞老志」は、右の「大高宮縁起」に続けて、同所の金瀬の市人・総兵衛の伝襲する「玉箇一管」の由来をあげる。[31]すなわち「世称ス、用明帝少時、豊後国眞野長一女玉世姫ヲ得ント欲ス、仍テ姓名ヲ変シ山路ト号シ彼家ノ牧奴ト為ル、常好テ笛ヲ弄ス、我州人以テ東奥刈田大高ノ故事ト為ス」と叙している。言うまでもなく、これもまた真野長者物語に準じた当地の玉笛伝説である。これをあげた編者は、「用明本紀両ラヒテ所見ナシ」と、その見解を示している。

右のごとく、その「大高山縁起」は、用明天皇の皇子が、川に捨てられて白鳥と化し、母の妃の葬られる陵墓に舞い降りたとする哀話を語り、その妃の鎮まる陵墓が大鷹宮となったと伝える。元来、大高山神社は、白鳥を求める大鷹を祀る霊所であったと推されるので、この叙述は、伝承の大きな屈折である。ちなみに「安永の風土記[32]」書き出しには、当社は「大高宮白鳥大明神社」と記されている。

さて、右の縁起とはやや違った児捨川伝説が、先の『刈田郡志』第十三章の「史蹟・名勝・伝説・古碑」の項に収められている。ちなみにそれは、宮地区の苅田嶺神社の縁起ともいうべきものである。[33]

日本武尊東征の砌、金ヶ瀬村小豆坂の士族万納長者の家に暫く御逗留あり。尊の帰京後、長者の姫一子を挙ぐ。其の子を見るにつけても都の空なつかしく、只都よりの便の来らん日を待ちこがれたるが、遂に其の来るべくも非ず、「われ死なば二羽の白鳥と化して必ず大和の空に飛びゆくべし」と遺言して流れに投じて死せり。果せるかな、二羽の白鳥が水面より飛び立ち、宮の西山に留り、後南の空に姿を消したり。村人姫の薄命を悲しみ、流れを児捨川と名づけ、且つ白鳥を祭神として尊及び母子の霊を祀り白鳥社を建立せり。其の大苅田山に祀りしを父宮と称し、王子をば西山に祀り、之を子の宮、又は西の宮と称せり。



白鳥伝説地図

これでは、当地に来訪された方は、日本武尊ご自身としている。それは祭神を日本武尊とする宮地区の苅田嶺神社の縁起として語られているからである。したがってこれには、「大鷹」のモチーフはもはやうかがえない。妃の出自の万納長者はやはり「真野長者」の影響と言える。その長者の家は、「小豆坂」と限定するが、それが、現大高山神社附近の自然の景にもとずくことは後にあげる。しかもこれでは姫の名は言わず、簡潔な叙述となっているが、二人ともどもの入水は、いちだんと痛ましい。しかも「子捨川」の「子捨」のモチーフの意義はいささか後退している

と言わねばならぬ。白鳥を祭神として、尊、母、子を祀ったとする白鳥神社は、現在の宮地における苅田嶺神社の信仰を反映したものと言える。父宮の祀ったとする大苅田山は、青麻山（釈迦岳）の謂いで、かつて本宮の意義を有していた。王子を祀るとする西山は、青麻山の南麓、宮地区の西方（字内方）にあり、青麻山の本宮に対する里宮の意義を有していたのである。祭祀地の移転にもとづく叙述でいささか矛盾がある。ちなみに宮地区の苅田嶺神社は、白鳥と化した用明天皇の后妃を祀る所とする伝承も存する。[34] 右の叙述には、現在の苅田嶺神社の信仰に沿った改作の跡がうかがえるのである。

なお、これに準じた「児捨川由来」は、苅田嶺神社の神主による「山家氏神職之記」（江戸中期書写）にも収められている。が、これは、苅田嶺神社の元若宮の縁起として叙されている。[35]

②長袋村の由来

先にあげた『奥羽観蹟聞老志』には、同じ巻四〈名蹟類〉の項に、次のような伝承が収められている。

投嚢邑（ナケフクロムラ）

郷人之ヲ長袋村ト曰フ。投嚢長袋相近シ也。故ニ之ヲ誤リ呼フ也、此村落也縁竹ヲ産ス地、是亦用明帝ノ后妃、徒歩疲労之余、裹ム所之餱糧ヲ投ス、乃之ヲ投嚢ト云、

右にあげる字長袋は、旧福岡村にあり、児捨川の南方、白石川の西方にある集落である。ちなみに児捨川は、長袋村の東北において白石川に流れ込む。また字深谷は、同じく旧福岡村に属し、児捨川の北方、白石川の西方にある集落である。この用明天皇の后妃にかかわる長袋伝説については、先の『刈田郡志』第十三章〈史蹟・名勝・伝説・古碑〉の項には、次のような伝承が収められている。

用明帝、小豆坂の土豪万納長者の家に密かに御降りあり暫く御滞在あらせられしが、御帰京の際、長者の姫君を伴ひ給ひたり、姫越河にて玉の如き子を産む。依ってこの地にて惜しき別を告げ、帝は京に、姫は子を背負い肩に袋をかけ、小豆坂へと急ぎたるが、姫は既に小豆坂も近ければ、袋の用も無ければとて、之を川に投じたり。之よりこの地を投嚢と云ひしを、何時の頃よりか長袋と変ずるに至れると。

軈て長袋中野村に於て姫は最後の添乳をなし、其の子を流れに投じ、「汝心あらば白鳥と化して飛び立つべし」と。既にして白鳥飛び立ち何れともなく姿を消したり。之より姫の立たれし橋を姿見橋と称し、白鳥の姿の消えし方を鳥越（深谷の鳥越屋敷）と称し、帝の滞留したまひし地に宮を立てゝ、白鳥を祀り之を大高山神社と称する。

つまりこれは、①「児捨川の由来」の異伝ともいうべきものである。帝を用明天皇とするのは、大高山縁起にしたがうものであり、その留まる家を小豆坂の万納長者とするのは先の『刈田郡志』の刈田嶺縁起に準ずるものである。それらの伝承と大いに違うのは、天皇は姫君を伴って帰京され、その途次、越河において姫君は御子を産み、そこで帝と別れを告げたとする。しかも姫は御子背負い袋を掛けて戻る途次、小豆坂に近づいたとて、その袋を投げたゆえに、その地を投げ袋と言い、長袋となったとする。以下は先の「子捨川由来」に準ずるものであるが、その御子の白鳥を祀ったのが大高山神社であるとするのは、その祭神を大鷹から白鳥と変ずるもので、先の大高山神社縁起の伝承を一歩進めて、現在の祭神説に近づくものとなっている。またその叙述には旧越河村や旧深谷村に祀られる白鳥神社への配慮もみられるのである。[36]

さて、奥州の白鳥信仰にもとづく日本武尊の伝説については、はやく堀一郎氏が「奥羽地方の日本武尊―附、白鳥伝説考―」[37] で詳しくあげて

深谷の鳥越集落

深谷の白鳥神社

おられる。それは、わが民族に根づく「遊幸信仰」の一環として説かれるものである。まず、「日本武尊の史実と伝承」を説き、東国地方における日本武尊伝説をあげ、奥羽地方の伝承事例を磐城・岩代・陸前・陸中・陸奥・羽後・羽前の各地のそれを示される。そのほかに当然、当地の金ヶ瀬村の大高山神社（大鷹宮）の伝承もあげておられる。そして最後に、

白鳥・白鷺・白鵠の伝説は単に近畿の白鳥三陵、東北諸地方の信仰のみには止らぬ。（中略）上来述べ来った天神遊幸信仰の一つの具体化せられた実例に外ならないのである。

と結ばれる。勿論、その事例のなかには、金ヶ瀬の市人総兵衛の伝襲する「玉笛一管」にもふれておられるが、それについては義父の柳田国男氏の「炭焼小五郎の事」[38]に委せておられる。

五．「朝日長者」の文化圏

右のごとく、わたくしは、『二荒山縁起』の編者は、有宇中将の鷹場めぐりにおいて、中将が迷い込んだ「朝日の里」を厚樫山を越えた異郷の地の白石盆地を想定していたと論じてきた。それならば、その朝日長者の住んでいたとする「朝日の里」は、当地に見出せるものであろうか。ちなみに朝日長者の伝承は、多くが鍛冶・炭焼の旧地にもとづくもので、しばしば「朝日さし夕日かがやく木の本に、云々」の歌を伴っている。それはまた、鍛冶の火とかかわる太陽（朝日）信仰をうかがしめるもので、白鳥伝説を伴うことも少なくないのである。

その太陽信仰にもとづく朝日の里は、それほど珍しいことではない。ちなみに当蔵王の山麓にそれを尋ねると、蔵王町の北部の旧平沢山の諏訪館に朝日山が見出せる。[39]そこは浄土真宗・成就山の墓地ともなっており、[40]「朝日山のきつねっこ」の昔話の舞台ともなっている。[41]しかし、朝日長者の伝説はうかがえない。その南方の旧円田村の伊原沢下の東には朝日山がある。[42]円田中学校の東の嶺であるが、やはり朝日長者の跡も鍛冶・炭焼の跡も見出せない。また鍛冶のわざにおいて繁栄したと伝える朝日長者であれば、その跡を尋ねてみる。まず蔵王町曲竹に青麻山を望む鍛冶沢がある。が、ここは縄文晩期の遺跡を留めており、その土偶などが世に知られている。[43]しかしその名の鍛冶の遺物は見出されていない。また蔵王町の西北端、旧小村崎村の鍛冶屋敷[44]を訪ねてみると、たしかに江戸時代までは鍛冶をわざとする人々が住んでいたことは確認できるが、その子孫に当る人々は、今は全くその鍛冶を伝えていない。勿論、朝日長者の伝説はうかがうことはできない。また白石市旧福岡村・蔵本に鍋石一番・鍛冶屋敷がある。[45]白石川の北岸に近い集落である。鍋石一番は佐藤姓、鍛冶屋敷は日下姓の方々が住しておられる。古老に尋ねると、

時折、田圃のなかから鍛冶の遺跡が見出されると言われる。やはり朝日長者の伝説を聞くことがないが、ここは後にあげる深谷台地の製鉄遺跡群に隣接する地域で、その連なりとしては、留意される。

さてわたくしの踏査では、蔵王山麓の蔵王町・白石市のなかには、朝日長者の伝説はうかがうことができなかった。そこで再び大高山神社（大鷹宮）の大河原崎町金ヶ瀬に戻る。およそその金ヶ瀬は、白石川が刈田の郡境（蔵王町宮地区）からは早瀬となって小豆色の地肌を洗って流れたので、金気のある瀬、すなわち「金ヶ瀬」と称したようである。[46]

ほんとうに鉄分が含まれているかどうかは確かではない。が、旧奥州街道沿いの坂道を赤い岩盤の色から小豆坂、または赤坂と呼んだのである。[47]現在の大高山神社はその坂道の南側の岩盤上に鎮座している。しかも、先にあげたごとく、『刈田郡志』は、「児捨川の由来」においては、日本武尊の滞留の宿を「金ヶ瀬村小豆坂の士族万納長者の家」、また、「長袋の由来」においては、用明帝のそれを「小豆坂の土豪万納長者の家」と叙している。勿論それは、「真野長者物語」に準じたものであるが、当地方において赤ヶ瀬の小豆坂は、長者伝説の聖地として語り継がれてきたことが注目される。あるいはそれは、金気のある「赤ヶ瀬」が炭焼長者を吸引することになったとも言えよう。ちなみに柳田国男氏は「炭焼小五郎の事」において、

陸前国柴田郡平村図
（『大河原町史』「通史編」より）

旧奥州街道の赤坂（小豆坂）

赤ヶ瀬の岩盤に立つ現大高山神社

豊後の「真野長者物語」が炭焼長者伝説の源流をなしたことを説かれたのである。[48]

さて、その金ヶ瀬・小豆坂（赤坂）にかかわる朝日長者の伝説が語り継がれていたのである。すなわち『大河原町史』〔通史続編〕の補遺編[49]の(2)伝説の項に、「赤坂長者」と題する伝承である。それをあげてみる。

赤坂山（一名、小豆山、金ヶ瀬の大高山神社をふくめて裏一帯の山）の土が何故赤いか。昔、ここにこの地方きっての長者が住んでいて、大きな蔵には小豆（あずき）が一杯入っていた。この長者が急に亡びた時、蔵の小豆がそのまま腐って土となったため、この山一帯の山土が小豆色に染まって赤くなったのだという。この長者が亡びた時、黄金や漆（うるし）などの宝物を赤坂山の裏手の奥深く埋めたと言い伝えられた。土地の人たちは昔から、その宝物のありかを、

朝日さし夕日かがやくそのところ
　四つ葉うつぎのその下に
　うるし万杯　黄金億々

という歌に託して言い伝えて来たが、まだそれを見つけた人はない。

しかし今から百年か百五十年前に、大山家（おおやんべ）の農家が馬を引いて朝草刈りにこの山に出かけたところ、一寸したすきに馬に逃げられてしまった。農夫は一生懸命馬を探したが見付けることができずすごすごと帰ってきた。ほどなくして、逃げた馬がとことこと帰ってきて、馬小屋に入ったのを見ると、馬の後足がべっとりと濡れている。不思議に思ってよくみると、朱漆がついていたのである。その話がみんなに伝わり、赤坂長者の話は本当だったと言うことになったのである。馬が山の中を駈け回るうちに朱漆の入った瓶（かめ）を踏み抜いたのであろうということであったが、それがどこであったかは依然として分らずじまいであった。

その後半は、伝承を確信する実話であるが、前半は、小豆山の由来を説く朝日長者の伝説であることはまちがいない。その伝説について柳田国男氏は、はやく「伝説の系統及び分類」などにおいて、そのほとんどが「長者栄華の華やかな空想」であると判じられていた。[50] しかし谷川健一氏[51]や真弓常忠氏[52]はしばしばそこに「鉄文化の古層」の跡のあることを説いておられた。またわたくしも、別稿において、出雲の「金屋子神祭文」のあげる朝日長者は、出雲・比田の山中で、いっとき、その鍛冶のわざによって富み栄えた家筋とかかわることを説いたのである。[53] が、この金ヶ瀬の「赤坂長者」の伝承は、いかが判じられるであろうか。あえて結論を先取りして言えば、これは柳田氏の説かれた虚構の伝承と判じられる。その伝承の根拠となる鉄山・鍛冶の跡はかならずしも見出されてはいない。[54] ただそこには酸化鉄の産出を確信させる自然の風景がある。つまりその伝説を吸引したのは、その鉄分を感じさせる金ヶ瀬であり、小豆坂の岩盤であったのではないか。しかもそれは白鳥の飛翔する聖地をかかえていたこととかかわるであろう。

それならば、鷹の里であり白鳥の里もある大高山神社、あるいは刈田嶺神社周縁に、有宇の中将が迷い込んだ朝日の里は見いだせないのであろうか。鉄山・鍛冶のわざによって、一旦はかく繁栄を欲しいままにした朝日長者は、単なる空想でしかないのであろうか。しかしわたくしは、大高山神社・嶺刈田神社からみるとやや白石川の下流、児捨川の白鳥伝説の舞台となった地に、かつて壮大な製鉄・鍛冶のわざが営まれていたことを知ることとなったのである。すなわちそれは、白石川の西岸、児捨川の北方に位置する福岡深谷の台地に見出されるのであった。

六．「朝日長者」の原郷・深谷台地

さて『白石市史』〔特別史（下）の1〕所収「白石地方の伝承」の(7)福岡地区には、「深谷白鳥社」の項に続けて「大太郎川」をあげている。

　深谷を流れる、この大太郎川の流域には、金滓（かねかす）の出る畑が多く、ときどきホドといわれる炉の跡が発見されており、平安時代のころ、刀鍛冶や武器をつくる人が住んでいたといわれてきた。（中略）この川をはさんで西岸に御所内と、東岸に兵庫屋敷がある。昔、日本武尊が征夷東征のみぎり、御所内におられ、蔵王町宮の内方屋敷の姫がお側に仕え、やがて皇子を河原で産み奉ったともいわれており、兵庫屋敷は尊の武器を納めていた倉があったところだ、と伝えている。

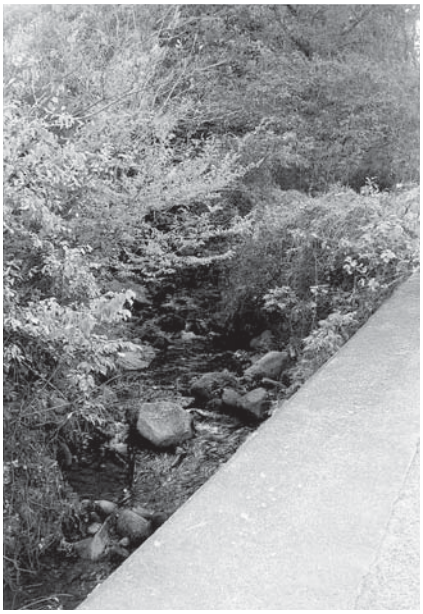
それは、宮の刈田嶺縁起としての「児捨川由来」とつないだ伝承とある。また続いて、

大太郎のいわれは、昔、大太郎という男が、この付近の紅花を京都に出荷して金に替え、金箱を馬につけて街道筋で一服してから、この川を通ったとき、何者とも知れぬ賊に襲われてここで殺されてしまった、という故事によるものだと伝えている。

と叙している。これは昔話化して伝えられているが、巨人ダイダラボッチ伝説の変容した伝承で、鉄人伝説の一連とみることができるのである。[55]

ところで、その大太郎川下流地帯の深谷台地は、有数な縄文時代の遺跡地帯であり、一部弥生の埋葬遺跡も知られている。それに複合する形で、多数の集落から製鉄遺跡が発見されたのである。その報告書[56]によると、その発掘調査は、昭和三十一年以来、地元の佐藤庄吉氏を中心に進められたのであるが、それは三十数軒に及ぶ平安時代の竪穴住居跡から検出され、現在、十六の製鉄遺跡が知られ、そのうち十四遺跡が青麻山を望む深谷台地を流れる大太郎川流域（一部、源氏川・三本木沢）に集中して分布する。しかもその製鉄の原料の砂鉄は、およそその大太郎川によって供給されていたと考えられている。[57]

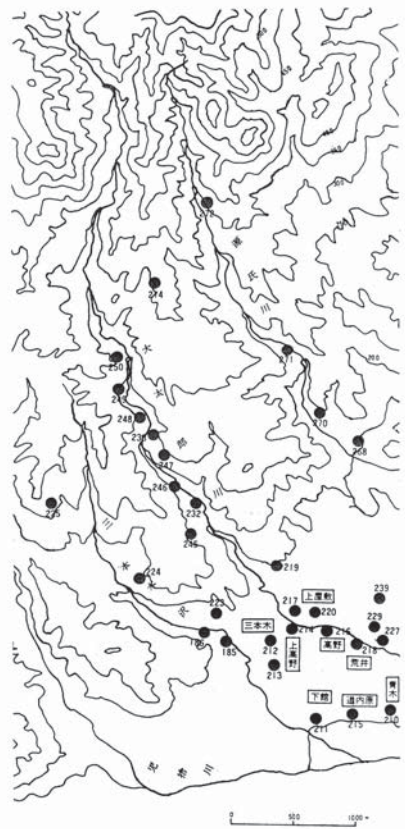
およそそれを調査報告―数字は遺跡番号―によると、佐藤庄吉氏が下館（211）・上高野（214）・上高野金神、道内原（215）・高野（216）・荒井遺跡（218）において多様な製鉄遺構を検出、このほか青木（210）・三本木前（213）・間内山（219）・上屋敷（220）・御所内（226）・湯ノ口（229）・高野原（239）・四ツ森遺跡（245）の二十地点に、鉄滓の散布地を明らかにされている。また岡山大学の和島誠一教授が昭和四十二年に佐藤氏によって示された製鉄遺構を確認、自ら道内原（215）・荒井遺跡の発掘調査をおこなっている。また佐藤氏は、その製鉄遺跡の形態・構造を、柴炉炉、条溝柴炉・石垣柴焼炉・天然送風炉・炭火炉・瓢箪形炉の五つに分類、素朴な土穴から耐火粘土製炉に発展したと想定されたという。また当深谷台地の製鉄の開始は、早く縄文末期とみられ、それが平安時代に至って急激に進展したものと考えられるとし、それは古墳時代以後の生活の進歩があり、多賀城を中心とした律令政治体制の整備の推進のなかで、需要の増大があったものと推される。[58]



深谷台地を流れる大太郎川

（右に同じ）

さてこの製鉄遺跡群は、遥か北方に聖なる青麻山を望み、その前山の丘陵の麓なる百米ほどの台地に存している。その青麻山を水源とする大太郎川は、その台地を通って、白石川に流れ込む。また当深谷台地の南には、白鳥伝説で紹介した児捨川が東流して、同じく白石川に注ぎ込んでいる。その台地の西南隅には平安時代初期の「堂田遺跡」がある。[59]平安時代の布目瓦（ぬのめ）や土師器が出土している。東西十四米、南北十一米の堂殿風の建物が青麻山を背に、南面に建っていた。自然石を礎石に入母屋か寄棟造りの草葺き屋根の一棟であったと推される。土地の人々は、昔から「神霊あらたかの地、災厄のまとう地」として容易



大太郎川流域の遺跡『白石市史』別巻（考古学編）より転載

に近づかなかった所である。ちなみに『白石市史』[60]は、〈堂田（どうでん）〉の項において、「古い寺堂跡は青麻山にやどる大刈田山神霊の拝殿であったのかも知れぬ」と推している。深谷台地に製鉄・鍛冶を営む人々の崇拝するものであったと言える。またこの人々が、鍛冶神として金神（かね）を祀っていることが知られている。それは台地の畑地に、しばしば発見されたもので、木祠・石祠をもって祀り、祭神は三面の像で、地元の人々は、「三宝荒神さん」と呼んできたという。[61]その精神文化の一端をうかがうものと言える。

それにもかかわらず、右の発掘調査の報告から、平安時代において当地に製鉄・鍛冶を営む人々の具体的な生活の全般をうかがうことはむずかしい。はたしていかなる共同体を組織し、いかなる社会体制で、それは営まれていたのか、はたまた、その製鉄・鍛冶にしたがった人々は、いかなる暮らしを営んでいたのであろうか。およそ国産の砂鉄による鍛冶が始められるのは七世紀から八世紀にかけてのことである。[62]東国における鍛冶については、『常陸国風土記』には、慶雲元年〔七〇四〕、国司が鍛冶を率いて、安是の湖の若松の砂鉄から剣を作ったとの記載がある。[63]し

深谷台地東南隅にある堂田遺跡

青麻山を望む深谷台地・製鉄遺跡の集落

かし、東国における初期の製鉄遺跡の多くは、九世紀以降のものである。[64]しかるに律令国家体制がようやく蝦夷の地に及ばんとする時代、その入口ともいうべき当地方に、相当大きな規模で製鉄・鍛冶のわざが営まれていたことは、驚きとすべきであろう。おそらくその製鉄・鍛冶のわざは、当初はきわめて粗朴で、まずは農耕に供せられるものであったろう。それが需要の拡大のなかで、その技術も徐々に進展したと考えられる。そして当地方には、いっとき大いなる繁栄をもたらしたにちがいない。しかし、右の調査報告によれば、その遺跡の最下限は平安中期ごろで、平安末期にはほとんど見出されなくなっている。それならば、当地方の製鉄・鍛冶は、新しい鍛冶文化の登場のなかで、その平安末期には衰退の道を辿ったものと推されるであろう。

そこで『二荒山縁起』の「朝

日の里」に戻る。およそ朝日長者伝説は、その衰退の後に発生する。鍛冶による繁栄を「古へ」に想定するのが朝日長者伝説である。朝日長者伝説が、当地に見出されてはいないが、「二荒山縁起」の「朝日の里」を当深谷台地の製鉄・鍛冶の里を想定するならば、それは平安時代以降の伝承ということになるであろう。そして深谷台地は、南方に白鳥伝説の児捨川によっており、東北にはその伝説とかかわる「鳥越」の地を有し、白鳥神社も擁している。すなわち深谷台地は、製鉄・鍛冶の里であると同時に、白鳥の里でもあったと言える。ちなみに白鳥伝説には、朝日長者を含むものが、日本の各地に少なからず見出されている。[65] 勿論、その白鳥の地は、白鳥を追う鷹の上手の集う聖地であった。製鉄・鍛冶を営む深谷の台地も、鷹場であったとも推される。

それならば、『二荒山縁起』の編者は、当地を「朝日の里」として鷹狩の上手・在宇中将の物語を作成したと想定できるであろう。そして当地の朝日長者の娘は、中将の跡を追って、ともども日光の神と示現したということになる。その日光山は、多くの鷹飼を輩出する聖地であると同時に、古くは鉄文化のメッカでもあった。[66] 単なる奇縁というべきものではあるまい。

注

① 『唱導文学研究』第八集（平成二三年〔二〇一一〕三弥井書店）所収。

② 大正九年〔一九一三〕玄文社刊（『定本柳田国男集』第十三巻、昭和三八年〔一九六三〕、筑摩書房）

③④ 細矢藤策氏「（翻刻）二荒山神社縁起」（『野州国文学』第十五号、昭和五〇年〔一九七五〕三月、国学院大学栃木短期大学国文学会）

⑤ 宮内省式部職『放鷹』（昭和六年〔一九三一〕、吉川弘文館）、秋吉正博氏『日本古代養鷹の研究』（平成一六年〔二〇〇四〕、思文閣出版）など。

⑥ 明治三三年〔一九〇〇〕、冨山房、第七冊。

⑦⑧ 福島県教育委員会『「歴史の道」調査報告書』（福島県文化財調査報告書・第121集）

⑨ 「奥州道中」は、江戸時代に江戸日本橋から宇都宮経由で白河までの街道であるが、後にはさらに白河（白坂明神）から仙台・盛岡経由で三厩までの街道を称した。

⑩ 刈田郡教育会『刈田郡誌』（昭和三年〔一九二八〕第十三章〈大刈田山薬師嶺、白鳥社〉）。また、白石市史編さん委員会『白石市史・3の(2)、特別史（下）の1』（昭和五九年〔一九八四〕白石市）「蔵王周辺の伝承」

⑪⑫ 右掲注⑩同書「白石市内の伝承」〈越河地区〉

⑬ 右掲注⑩同書「白石市内の伝承」〈福岡地区〉

⑭ 右掲注⑩『刈田郡誌』第十四章〈県社、刈田嶺神社〉

⑮ 柴田郡教育会『柴田郡誌』（大正十四年〔一九二五〕、昭和四七年〔一九七二〕、名著出版）中編町村誌・第二章「金ヶ瀬村」

⑯ 右掲注⑭同書、中編町村誌・第一章「村岡町」

⑰ 右掲注⑭同書、中編町村誌・第三章「船岡村」

⑱ 右掲注⑩同書『白石市史・3の(2)』「白石地方の地名と大字」〈鷹巣〉、『宮城県の地名』（昭和六二年〔一九八七〕、平凡社）、「白石市」〈鷹巣古墳群〉など。

⑲ 『大河原町史』（〈通史編〉昭和五七年〔一九八二〕、大河原町）第三章第一二節〈金ヶ瀬・平村〉

⑳ 宮城県文化財調査報告・第62集「東北新幹線関係遺跡調査報告書」Ⅱ（宮城県教育委員会・日本国有鉄道仙台新幹線工事局、昭和五五年〔一九八〇〕）

㉑ 大高神社蔵『鰐口』（重要文化財指定）の銘刻文に「奉納大鷹宮御宝前鰐口一口」「正応六年癸巳三月五日勧進法橋玄応」とある。正応六年〔一二九三〕のことで、「大鷹宮」と称されていることが知られる。

㉒ 右掲注⑲に同じ。

㉓ 大河原町教育委員会・大河原町文化財友の会「大山神社を語る」（平成十一年五月十五日）資料「大高山神社の別当寺・大高山大林寺」の項、参照。

㉔ 『白鳥伝説』（昭和六十年〔一九八五〕、集英社）第二部第三章「奥州安

倍氏の血脈〈鷹と白鳥―大高山神社とは何か〉

㉕『戦国大名と鷹狩の研究』（平成十八年〔二〇〇六〕、纂修堂所収）

㉖『白石市史』4、史料編（上）（昭和四六年〔一九七一〕、白石市）。初代景綱から九代景貞まで、約二百八十年にわたる日記ふうの記録。

㉗「放鷹文化の精神風土―交野・為奈野をめぐって―」（『説話・伝承学』第20号、平成二四年〔二〇一二〕）、「放鷹文化の精神風土（承前）―信州滋野をめぐって―」（『伝承文学研究』第62号、平成二五年〔二〇一三〕）

㉘ 洞巌佐久間義和著。

㉙ なお大高山神社には、元禄十年〔一六九七〕別当大林寺の沙門寛深が上洛して、当時の名僧・公卿が分書して作成した「縁起書」（上下二巻）、また正徳六年〔一七一六〕に京都神道管領長上下部朝臣作成の「縁起書」が蔵されている。いずれも記・紀の日本武尊の白鳥説話にそって、原縁起を書き改めたものである。後者は『大河原町史』〔諸史編〕（大河原町、昭和五九年〔一九八四〕第八章第一節〈大高山神社〉の項に収められている。また村田の白鳥神社にも、「大高山縁起」に準ずるものが蔵されている。これは当社の別当・定能寺の僧寛深が、元禄十年〔一六九七〕に上京して選定したもので、先の『奥羽観蹟聞老志』も言うごとく、平村の大高山神社の縁起を村田の神祠を主として書き改めたものである。これは『蔵王町史』〔通史編〕（蔵王町、平成六年〔一九九四〕）の「白鳥伝説のなぞ」に一部収載されている。

㉚ 柳田国男氏「炭焼小五郎の事」（『定本柳田国男集』第六巻、昭和三八年〔一九六三〕、筑摩書房）、同氏『伝説』昭和十五年〔一九四〇〕、岩波新書（『定本柳田国男集』第五巻、昭和三七年〔一九六二〕、筑摩書房）、拙稿「『真名野長者物語』以前」（福田晃ほか編『鉄文化を拓く　炭焼長者』平成二三年〔二〇一一〕、三弥井書店）

㉛『奥羽観蹟聞老志』は、この「玉笛」を、惣兵衛の先祖が、喬木の空洞より発見したものと叙す。しかるに、右掲注⑮『柴田郡志』所収「金ヶ瀬村」の〈伝説口碑〉によると、この玉笛は、「金ヶ瀬の駅平間何某」という良農の家に伝わってきたもので、それは元は「柴田郡平村百姓御山守屋敷惣兵衛」の十一代前の先祖が、田地開発の折、掘り出したものと伝えている。

㉜「柴田郡平村風土記御用書出」（『宮城県史』23〈資料編〉所収）

㉝ なお、『奥羽観蹟聞老志』巻之四「名蹟類」㈠の苅田神社〈苅田嶺神社〉の項には、「吉川氏所ㇾ記宮社ノ縁起曰、所ㇾ祭白鳥ノ明神ハ乃日本武尊也」とある。ここにあげる「子捨川由来」を叙す苅田嶺神社縁起は、これによったものと推される。しかし、本書は、続けて「神道家ノ説ニ曰フ、刈田宮ハ用明天皇ノ后妃ヲ祭ル所ナリト」と叙している。ところが、右掲注⑩『白石市史・3の㈡』の「蔵王周辺の伝承」には、〈白鳥明神氏子の伝説〉として、用明天皇の妃が子を抱いたまま入水（児捨川）、二羽の白鳥と化して宮の西山にしばし留まり、やがて南の空に姿を消したので、村人は白鳥を祭神として尊と母子の霊を祀る白鳥社（刈田嶺神社）を建立したと伝える。しかも、この伝承が「用明天皇から日本武尊に変ったのは、吉川惟足に縁起を書いてもらったからだ」と説く。ちなみに当社には、享保元年〔一七一六〕に龍宝寺住職・実政泰吉筆の「陸奥刈田郡総社白鳥明神縁起記」（『蔵王町史』〔資料編Ⅱ〕平成元年〔一九八九〕所収）があるが、これもまた来遊の王子は、日本武尊として叙している。

㉞ 右掲注㉝参照。

㉟ 右掲注㉙『蔵王町史』〔資料編Ⅱ〕所収。冒頭、「白鳥宮は往古刈田嶺神社とて薬師が峯に鎮座し給ふ。是日本武ノ尊也。西ノ宮は若宮と申て、日本武尊乃御子を祀り給ふ」とある。薬師が峯とは青麻山の後の呼称である。しかして「荒子屋敷之事」として「子捨川由来」をあげ、日本武尊の妃・玉なに姫（於）は、「今の柴田郡平村大高宮之神是なり。御乳人をば芦立村にて御乳ノ明神と申て社有り」とする。

㊱ 福島・宮城両県境の国道四号線沿いに、「下紐（したひも）の石」が存する。これは、長袋伝説において、用明天皇の妃が皇子を生んだとする跡と伝えるものである。また、同伝説において、皇子が白鳥と化して消えたとする鳥越は深谷にあり、近くには白鳥神社が祀られている。

㊲『我が国民間信仰史の研究』㈠〔序編・伝承説話編〕（昭和三〇年〔一九五五〕、創元社）

㊳ 右掲注㉚に同じ。

㊴『蔵王町史』〔民俗生活編〕（平成八年〔一九九六〕蔵王町）第二編「地名」〈平沢区〉。

㊵『蔵王町史』〔通史編〕（平成六年〔一九九四〕、蔵王町）第四編第二章第五節〈平沢村〉

㊶ 平沢青年会編「平沢のむかしむかし」、右掲注㊴『蔵王町史』〔民俗生活編〕第一編第九章〈昔話〉再録。

㊷ 蔵王町平沢地区在住の郷土史家・鹿島茂氏の教示による。

㊸『蔵王町史』〔資料編Ⅰ〕（昭和六二年〔一九八七〕、蔵王町）第一編〈鍛冶沢遺跡〉

㊹ 右掲注㉜『蔵王町史』〔民俗生活編〕第二編「地名」〈小紫崎東区〉に属している。

㊺ 右掲注⑩『白石市史・3の(2)』所収「地名の研究」(8)福岡村〈蔵本〉に「鍋石一番」「鍋石二番」「鍛冶屋敷」があげられている。

㊻㊼ 右掲注⑲『大河原町史』〔通史編〕第三章第十二節〈金ヶ瀬・平村〉

㊽ 右掲注㉚に同じ。

㊾『大河原町史』〔通史続編〕（平成一〇年〔一九九八〕「補遺編」〈伝説〉）。なお、『安永風土記』（「風土記御用書出」）の「平村」の項に、「一坂壱ツ一小豆坂　長サ三丁　刈田郡宮町江之往還道」とある。

㊿『定本柳田国男集』第五巻（昭和三七年〔一九六二〕、筑摩書房）。柳田国男監修『民俗学辞典』（昭和二六年〔一九五一〕、東京堂）

(51) 谷川健一氏「鉱産と関わる朝日長者伝説の明白な実例」（『青銅の神の足跡』、昭和五四年〔一九七九〕、集英社）

(52)『日本古代祭祀と鉄』（昭和五六年〔一九七一〕、学生社）、『古代の鉄と神々』（平成九年〔一九九七〕、学生社）

(53)「中世の鍛冶神話―「金屋子神祭文」の伝承世界―」（『説話・伝承学』23号）

(54) それにもかかわらず、大高山神社には、鉄の遺品・遺物を少なからず存している。右掲注⑮『柴田郡誌』第二章「金ヶ瀬村」〈神社仏閣〉の「郷社大高山神社」の項には、「鼎」（鉄製、伝弘法大師使用）、「古釜」（鉄製丸型、直径一尺五寸、作者不明）、「鉄塔」（和泉三郎忠衡の寄進、元禄十五年〔一七〇二〕、旧社地を巨る東南富田の地より発掘）、「南蛮鉄鳥居」（年代不詳、古来より伝わる）が見える。またかつての鎮座地の「台の山遺跡」からは、鉄製品（鉄鏃、刀子型製品、棒状製品、鉄滓付着のフイゴ）などが発掘されている。

(55) 柳田国男氏「ダイダラ坊の足跡」（『一目小僧その他』昭和九年〔一九三四〕小山書店）（『定本柳田国男集』第五巻、昭和三七年〔一九六二〕、筑摩書房）

(56)(57)『白石市史』別巻〔考古資料編〕（昭和五一年〔一九七六〕、白石市）Ⅱ・4「奈良・平安時代の白石市周辺」〈深谷台地〉

(58)『白石市史』〔通史編〕（昭和四五年〔一九七〇〕、白石市）第二章第三節「平安時代」〈製鉄集団の発生〉、右掲注㉞『蔵王町史』〔通史編〕第二編第二章「古代」〈刈田郡の生産遺跡〉など。

(59) 白石市教育委員会編「白石市文化財報告書」第9号「堂田遺跡―白石市福岡八宮―」（昭和四六年〔一九七一〕）

(60) 右掲注⑩同書、「小字地名」（8）福岡村（八宮）

(61) 右掲注(56)同書、「白石市周辺の考古学研究史」〈深谷鍛冶遺跡の発掘〉の項。

(62) 窪田蔵人氏『鉄の生活史―鉄が語る日本歴史―』（昭和四一年〔一九六六〕、角川書店）「「王朝の確立と製鉄の普及」。ただし近年、それは、六世紀にまで遡るものとされている（たたら研究会編『日本古代の鉄生産』（平成三年〔一九九一〕六興出版、参照）

(63)「香島郡」〈高松の浜〉の項に、「慶雲元年、国の司、婇女朝日、鍛、佐備の大麻呂等を率て、若松の浜の鉄を採りて、剣を造りき」とある。浜砂鉄による鍛冶が叙されている。

(64) たとえば、東京工業大学製鉄史研究会編『古代日本の鉄と社会』（昭和五七年〔一九八二〕、平凡社）は、古代の製鉄遺跡として、茨城県結城郡八千代町の「尾崎前山遺跡」の発掘調査を報告されているが、これはおよそ九世紀中～後期と推定されている。

(65) 特にそれは、北九州方面に見出されている。山中耕作・宮地武彦両氏編『日本伝説大系』第十三巻〈北九州編〉（昭和六二年〔一九八七〕、みずうみ書房）の「朝日長者」の項、参照。

(66) 細矢藤策氏「勝道上人の伝（三）―勝道の裏面的性格―」（『鹿沼史林』第十号、昭和四六年〔一九七一〕）（『古代英雄文化と鍛冶族』平成元年〔一九八九〕、桜楓社、所収）。同氏「大蛇と百足の神戦譚―二荒山神社縁

起『俵藤太物語』の鍛冶信仰」（『国学院雑誌』第一〇四巻第九号（平成十一年〔一九九九〕）。また「二荒山縁起」の第二部にあげられる日光神（大蛇）と赤城神（百足）の神戦については、若尾五雄氏の「百足と金工」（『日本民俗学』八五号、昭和四八年〔一九七三〕）、「赤城山の百足と金工」（『鬼伝説の信仰―金工史の視点から―』昭和五二年〔一九七七〕、大和書房）、田中久夫氏「百足と蛇」（『金銀島日本』昭和六三年〔一九八八〕、弘文堂）などがある。

〔追記〕

本稿を成すに当っては、白石市・蔵王町・大河原町の各教育委員会のお力添えをいただいている。また同地域の調査に当っては、教育委員会の皆さんのほか、地元の多くの方々のご教示を承っている。いちいちお名前はあげないが、誌上をかりて、各位に御礼を申し上げたい。なお、再三にわたる現地調査には、静岡文化芸術大学の二本松康宏氏が、必ず同道して、わたくしのそれを支えてくれたのである。「ありがたい」教え子である。謝意を添えておきたい。

（本学名誉教授）